自然保護の国際的動向

犬飼哲夫

自然ならびに天然資源の保護については第二次世界大戦の後、国際的に関心が高まり、国連でもこの問題をとりあげ、積極的に運動が開始され、とくに低開発国に対しては、これに関し援助の手が延べられていることは周知のとおりである。

日本が敗戦の絶望と戦後の疲弊から速かに立ちなおり、自然保護については他からの後援は、もちろん必要としない。しかしながら国力の復興と平行して、自然保護が必ずしも最近の国際的動向に添って発展しているとはいい得ない。むしろ、自然保護に関する理念や実際運動が、経済復興に立ちおくれた感があり、そのため、自然の破壊が加速度的に進行しているのは寒心に堪えない。

いまこそ声を大にして、日本の自然の荒廃を未然に防ぎ、世界の文化国と足なみをそろえる大切な時期で、自然は人為加工物と異なり、ひとたび破壊されたら復活することは不可能で、悔を後世に残すことになる。ここでいまさら自然保護の理念を強調することはやめ、わが国に直接関係ある自然保護の国際的動向の二、三を述べ、今後の運動に資したい。

まず第一にあげなければならないのは、現在世界的に問題になってきた農薬と自然保護の関係である。わが国は、数年間つづけて記録的豊作にめぐまれた。その原因は決して天候のおかげではなくて、農薬を活用したためであることは広く認められている。面積の狭い国土でありながら、農薬の使用量においては世界一である。世界最大の生産国はアメリカであるが、使用量は、わが国より少ないことは驚くべきことである。

ところがアメリカでは現在、農薬の公害問題が大きくとりあげられ、人畜ならびに野生鳥獣に対する被害がひんぴんと訴えられ、その防止に真剣になっているのに、日本では豊作の夢に眩惑されて、不精無精この問題に手をつけはじめた状態である。

アメリカで農薬の公害が問題になりだしたのはいまから五年前の一九六二年に、カーソン女史が、「沈黙の春」という本を出してからである。この本の主旨は世に楽しい春がきても、小鳥一羽鳴かない暗黒時代がくる。アメリカ全土にわたって農薬のために、時々刻々小鳥がいたるところで斃されているという。これが全米はもとより、世界的に反響を呼び、この本はベストセラーの一つになった。

「沈黙の春」は若干は感傷的なところもあるが、現実はそれよりも深刻で、農薬の公害対策が各国で真剣に検討されはじめ、この著書の貢献はきわめて大きい。保健衛生の立場からも、さらに自然保護の立場からも、世界的に大きな波紋を投じた。

さてこの問題につき、わが国がいかなる方向に進むべきかは今後の課題であるが、現在、積極的にとられている道は、日米科学協力会議の一部門が中心になって、相互に意見を交換し、あるいは共同研究もなされようとしているのである。

農薬を使わずに、天敵を利用して害虫を駆除する。化学薬品でなくて、細菌やビールスを利用する。やむを得ず農薬を使う場合は、従来のように向う見ずにふり撒くのではなくて、害虫を一カ所に誘引して小範囲に集めて殺す方法。そのための誘引物質の発見等々、農薬問題、駆除問題は大きく転換して、自然物に対する被害を最少限度にとどめる方向に努力がなされている。

つぎに、昨年の夏ロンドンで開催された国際鳥類保護会議第十四回世界会議で、二十九カ国の代表と国際自然および天然資源保護連盟、国際生物科学連盟、海水の汚染防止連盟、その他の保護団体が決議して、主として野生鳥類に対する各種の被害をあげ、その保護と対策を主要国の政府に訴えた声明書を送付した。

その主な点はやはり農薬の正当な管理、自然環境の汚染防止、無謀な猟具の制限な

どであった。この会議は昭和三十五年に東京で開かれて十六カ国の代表が参加した。日本には鳥類保護連盟があり、若干の政府の補助金を受けている。また、日本野鳥の会は、年々ますます盛んになり会員も増加して、現在では確固たる保護団体になって活動している。愛鳥思想はやはり世界的傾向で、日本の愛鳥運動は国際的水準に達しつつあり、自然保護運動の具体的なものの一つで、各方面でこのようでありたい。

最後に述べたいのは、昨年の夏、東京で開催された第十一回・太平洋学術会議の自然保護部門のことである。これに関しては日本自然保護協会から出している「自然保護」第五八号に詳しく述べられているからここで詳細を論ずる必要はないが、私が出席し、また報告した部会だけを報告する。

第一〇回は四年前にハワイのホノルルで開かれ、このときは出演者にはアメリカが軍用輸送機を提供してくれ、日本からは八十数名が参加した。その自然保護部会に出席したとき、驚きかつ嬉しかったことは、日本の田村剛博士が出席したので、そのときの座長が一同に向って、自然保護ならびに国立公園に関し貢献した権威者で、大先輩である田村博士に敬意を表したいから、起立してほしいといわれたことがある。これというのも、田村博士が戦前にいち早く日本の国立公園の設置に努力し、日本の美しい自然を保護したことが世界的に知られているからである。

ハワイの会議に比較して、昨年の東京の会議はさらに規模が大きく、参加者も多く自然保護部門でもハワイのときよりも活発であった。惜しいことに、日本側の出演者の報告内容はきわめて優秀であったが、英語が非常に下手で、かつ遠慮がちのため、かえって聞きとりがたかったことである。しかし、各々報告書を提出したから、じゅうぶんに価値は評価されたと思われる。

私の出た部会では、キリスト教大学のホスレット博士と私が交代で座長をつとめたが、この部会では自然保護教育の問題がなかった。それに関して自然保護部門の総会で、たとえば北海道大学などに自然保護の講座を設置してほしいということを、決議事項の中の一項に入れてくれたことは嬉しかった。これにはホスレット博士や、韓国代表の金、元両博士も大いに援助してくれた。しかし、日本の一般の空気がこの決議に対して、反応を示す域に達していないことは遺憾であるが、今後のわれわれの活動いかんによっては、実現は不可能とはいえない。

最後に一言したいのは、以上述べたような最近の自然保護の国際的傾向をみても、自然保護は単に自然景観の保存保護ばかりではなくて、あらゆる自然的に対する問題がとり扱われていることである。自然景観の破壊は、たしかに現在目前に迫っている重大問題で、これに対しては万全の措置を講ずべきことはいうまでもないが、それだけが、自然保護の対象でないことは心得ておかねばならない。

（北大名誉教授・副会長）